

藤原仲文考

篙 裕 子

序

藤原仲文は、平安中期以前の歌人である。能宣、元輔等と共に、三十六歌仙のひとりに加えられているが、あまり世に知られていない。しかし、諧謔歌を得意としていた点で三十六歌仙中、異色の歌人であるといえる。

仲文の歌集は、三十六人集のひとつで、諸本は二つの系統にわかれている。国歌大観所載の歌仙家集本は五十四首群書類従本は六十四首である。そのうち、共通した歌は三十一首で他は異つてゐる。なお、図書寮本は歌仙家集本に三十二首追補したものである。これらの諸本の詞書の中で仲文のことは「同じ人」「仲文」「国茂」といつてある。このように、歌仙家集本と群書類従本とは、内容が一致していないので、共通した歌を資料とする場合は一応、国歌大観所載の歌仙家集本を利用し、又、異つた歌を資料とする場合は「歌仙家集本」「群書類従本」と注を施すことにする。

この仲文集を基として、系図その他の諸資料を照合、考察することによって、「藤原仲文」なる人物について多少

なりとも知り得たらと思つるのである。

本論

(一) 家系

仲文は藤原家四門のひとつである式家(字合)の子孫である。父は信濃守従五位下公葛、母は未詳である。兄弟姉妹は尊卑分脈(系図1)によれば、兄の仲遠、弟の仲陳、公葛女として姉あるいは妹がいたと考えられる。次に仲文の子供であるが、尊卑分脈では聡亮ひとりが示されているが仲文集の詞書に「女なくなりてなげく比。けせうせし人。五月五日をこせたる」(群書類従本)「婿のともみつ…」(歌仙家集本)「……服なる程に婿の蔵人に」(歌仙家集本)とあるので、仲文には女子があったと考えられるわけである。

なお、兄の仲遠に関しては、本朝法華驗記の第四百四に「越中前司藤原仲遠。天性所催。心不好悪。及於壯年。常作是念。命如薤露。……中略……寂後臨終。病患不乱心。起居亦輕利。口誦妙法。心信仏法。奇香薰鼻。妙音聞耳。

則与語言。只今当生兜率天。合掌即世矣。」とあり、同じような内容で今昔物語語卷第十五に「越中前司藤原仲遠、往生兜率語第州五」とあり、仲遠が非常に信心深い人であったことが記されている。また、日本紀略に「長保元年正月

廿七日辛巳東三条院侍大膳進藤原仲遠献_{証子}白雉。」と記されているが、尊卑分脈では、仲遠は従五位上備中守になっており長保元年に「大膳進」というのは、あまり位が低いようである。別人かとも考えられる。しかし尊卑分脈では「藤原仲遠」は彼のほかには存在せず、日本紀略の誤りかとも考えられる。たゞ、同時代に「橘仲遠」なる人物が存在するが、はたして彼の誤りであるかどうか本稿では考察し難い。

(二) 出生および歿年

仲文は一説では興範の子であるといわれているので、その真偽を確かめることにする。なお公葛に関する資料不足のため、興範に関する資料を主として考察する。

公卿補任によると興範は、延喜十七年に「参議弹正大朝正四位下」で歿している。

仲文の歿年は資料により異つていて、

- 〔三十六人歌仙伝〕 散位正五位下藤原朝臣仲文信濃守従五位下公意三男
- 天曆……中略……貞元二年正月任三上野介、八月二日歿
- 正五位下造大、三年二月卒、年七。

〔拾芥抄〕 藤原仲文伊賀守、五位、至正曆三月卒七十信濃
〔勅撰作者部類〕 守公葛二男

仲文 五位上野介、改国茂、陸奥守藤原公葛男
至貞元八年

となつてゐる。なお大日本史料には、これらの資料を集成した上で、正曆三年二月是月の項に「是月、散位正五位下藤原仲文卒」と記されている。そして「三十六歌仙伝は年号(正曆)を書き落したのではなからうか」といつている。勅撰作者部類が貞元八年としてゐるが、貞元の年号は三年(天元)までしかないので誤りである。はたして大日本史料がいつてゐる通りに歌仙伝が正曆の年号を書き落したかどうか疑問であるが、仲文の歿年考察と併せて考えていくことにする。

(四) 群書類従本に

○同しなか文。堀川の中宮おはしまさて後、ひと／＼あまになると聞て。少将の内侍の許に

数へつづきても過つる世を背くうしろてともそ思ひやらるゝ

とあり、同じ歌で歌仙家集本の詞書には

○堀川の中宮うせ給ひて中宮内侍のすけせしなど
尼になりたるもとに 仲文

とあるが、この詞書を史実と照合すると堀川の中宮とは円融后嬪子のことで、堀川の関白兼通のむすめである。大鏡裏書によれば、中宮嬪子が歿したのは天元二年六月である

からこの歌の詠歌年次はそれ以後(天元二)でなければならぬ。従つて仲文が貞元三年に歿したという説は、この歌の詞書からは成立しない。

(四) 群書類従本に

○大入道殿・つかさとられて又の年・なりかへり
給ひたりし

去年は思ふことしはみれば神無月しくれかはれる心ち社すれ

とある。大入道殿とは太政大臣兼家のことで大鏡の太政大臣兼家の章に「堀川の摂政のはやりたまひし時に、この東三条殿は御つかさども停められさせたまひて、いと辛くおはしましし時に……」とあり、事実上に於ても兼家と兼通が仲が悪かったのは確かである。兼家は二回ほど低い位の時があったが、私としては、この歌の詞書にある「なりかへり給ひたりし」時というのは兼家が摂政の位に即いた時のことと解釈したい。もし、摂政になつた時のことであれば、兼家が摂政となつたのは寛和二年であるから、この歌もまた、仲文の歿年を正暦三年とするひとつの手掛りとなり得る。

(五) 群書類従本に

○仁和寺の御はての日。物いみにさしこもりてゐたるに。
たて文にて法しわう子。けふすぐにのみましき御文なりとて
さしをきたるをみれば。くるみ色のしきしに。
あやしき手して

これをたにかたみと思ふに都にはかへやしつらんしる芝の袖

○後にきけば、とうのわたりよりある成けりと聞て。いみ
ふ じうあやしがりけり。同じことなれと、かくこそはと思

惜まれは衣のうちにかけてみん玉のきすとやならんとすらん

とある。仁和寺の御はての日とは、円融上皇の御一周忌のことであるが、円融上皇の崩御は正暦二年であるから、この歌の詠歌年次は正暦三年である。なお「これをたに……」の歌は枕草子第一一九段にあつて、その詠歌事情も仲文集の詞書と一致する。この歌の作者は、枕草子では「藤大納言」、仲文集では「とうのわたり」とあるから、おそらく朝光か道長であろう。いづれにしても枕草子第一一九段の「これをたに……」の歌が、仲文集中に収められているということは非常に興味深い。仲文は、清少納言の父である元輔と親しかつたようで、その贈答歌も仲文集中にあり、その点から、清少納言が、このちよつとした事件を仲文から聞いたのではないかとも考えられる。しかし、清少納言は、この年(正暦三年)に宮仕へに出ているので必ずしもそうとはいえず、あくまでも仮説とするほかはない。

このように、(イ)(ロ)の歌を史実その他と照合しつつ仲文の歿年を考察した結果、正暦三年説が正しいという確證を

得た。従って、大日本史料がいつているように、歌仙伝は正暦の年号を書き落したといえる。

仲文は、七十一才で死んでいるから、正暦三年から逆算すると仲文の生れた年は、延喜二十一年となる。前にも述べたように、興範は延喜十七年に七十四才で歿しているのので、仲文を興範の子とするのは不可能である。また、系図にも示したように、仲遠、仲陳と同様に「仲」文と名づけられていることからしても仲文が公葛の子であることは間違いないであろう。

(三) 贈答関係にあった人々

仲文は、その生涯に於て、かなり多くの人と交際がありそのほとんどの人物と贈答関係にあったようである。主な人物をあげると、藤原公任、清原元輔、大中臣能宣、菅原輔昭、本院の侍従などである。これらの人々との交わりの中に仲文の人となりが見い出せたらと思ひ、仲文集、その他種々の資料をもととして考察していくことにする。

(本稿では紙面の都合上、主なる人々を数名選び、考察の対象とする。)

△清原元輔▽

元輔は、前にも述べたが、清少納言の父である。源順、大中臣能宣、坂上望城、紀時文と共に、後撰集を編集し、

また万葉集に訓点を施した梨壺の五人のひとりであり、仲文と同様に三十六歌仙にも加えられている。

贈答歌は、

○ 同じ人かうずけに。もとすけすはうにくたる道に。
えとまりといふ所より、いひをこせたる

えとまりに我きたりとは知ねはや今まで君かみにこさるらん (群類)

○ かへし、もとすけ

限なきよりこをこのむ君なればかへりはみしにまさり之けり (群類)

とある。

元輔という人は、洒落、諧謔をよくする快活な人であつたらしく、今昔物語卷二十八「歌読みの元輔加茂の祭に一条の大路を渡る語第六」とあり、その本文の末尾に「この元輔は馴れ者の、ものをかしくいひて、人笑はするを役とする翁にてなむありければ、かくもおもて無くいふなりけりとなむ語り伝へたるとや」と書かれている。仲文の歌はそのほとんどが諧謔歌であると契仲が「河社」のなかで批評しているので、この点で仲文と元輔は親しかったと考えられる。

△大中臣能宣▽

能宣は、延喜二十一年に生れ、正暦二年に七十一才で歿しているから、仲文とほぼ同年である。能宣もまた、元輔と同様、梨壺の五人のひとりであつて、三十六歌仙に加え

られている。八雲御抄に「能宣、元輔は為三重代之上尤可⁺然^レ歌人なり」とあるように、元輔と共に当時の最も優れた歌人であった。

仲文との贈答歌は拾遺集雑下に、

(詞書)

能宣に車のかもをこひに遣はして侍りけるに
侍らずといひて侍りければ 藤原仲文

かを指て馬といふ人有ければ鴨をも惜しと思ふなるべし

(詞書) 返し

能宣

なしといへば惜むかもとや思ふ覽鹿や馬とぞ云べかりける

とある。「かを指て馬といふ人有ければ」というのは「史記」の秦始皇本紀の中にある「謂^レ鹿為^レ馬」の話を引用したものと思われるが元輔、能宣との関係からみるに、仲文も一応当時の常識人であったということが出来る。

△すけあきら▽

仲文とすけあきは同僚であったらしく、次のような贈答歌がある。

殿にさふらひて、すけあきらとふな逍遙せんとして
○さだめてすさのみにぬはふなはいかにといひたれば
いまかひにこそはつかはさめといひたるにやる

めに近く我をはをきてあふみふなかひつやりつといふは
真か (群類)

○かへし、すけあきら

つくまゑのこひはみゆると命をそかひつやりつるつるの
郡に (群類)

このすけあきらなる人物については「前大納言公任卿集」の詞書にすけあきらの名がありまた、すけあきらの詠んだ歌が数首収められているので、このすけあきらを歌人と推定して調べたところ、菅原輔昭が該当した。輔昭の歌は拾遺集および新古今にとられているが極くやわらかい感じの歌が多く、仲文とは対照的である。

△ともみつ▽

仲文の家系に關する項でも述べたように、仲文には一女子があつたということが仲文集の詞書よりわかつたが、歌仙家集本に

○哥のともみつこえて置きたりける物のぐども運ぶに
鏡のとまりてありける遺るとて

影絶て覚束なきの増鏡見ずば我身のうさも知られず

○返し ともみつ

君と我形見に見むと増鏡、底にとまれる影さへやうき
きたりとは聞くらむ物を藤衣かけて哀と云ふ人のなき

○返し

今はとて返しよりも藤衣きたりと聞くは最ぞ悲しき
とあつて、仲文の娘の婿としてともみつなる人物がいたことがわかる。この婿のともみつは、藤原知光が最も適している。「きたりとは……」の詞書に「藏人に」とあるが、

系図3に示したように知光は藏人になっているので、この

歌の詞書の裏付けができるわけである。

△本院の侍従▽

本院の侍従は、尊卑分脈によれば、筑前守藤原則光の母となつてゐる。(系図4) 則光は、前に述べた藤原知光、すなわち仲文の娘婿と兄弟である。

本院の侍従は、後撰集時代の女流歌人であるが、その生没年は未詳である。和歌文学大辞典は本院の侍従について「天慶のはじめから天徳年間の末頃まで村上天皇の後安子同承香殿女御(斎宮女御)などに仕へ、その間、青年期の伊尹、兼通、朝忠等との恋愛関係が、時もほぼ併行的にあり、その二十代三十代を多くの貴公子たちにもてはやされて送り『天徳四年内裏歌合』の列席をもつて年次分明の最後とする」と述べてゐる。

仲文との贈答歌は

○本院の侍従の君国茂が扇を取りてこへど返さで
又のあしたに

君にても思下らぬ心には扇という名立たじとぞ思ふ

(歌仙)

○返し をこし

あらがへど人に云へとや云なとや思返せどかひ無物を

(歌仙)

というような歌がある。

本院の侍従が浮気者であつたことは朝忠集にも表われてゐるが、仲文が同じように浮気者であつたことを考え合わ

せると興味深いものがある。また、娘婿の兄弟の母親であるということもおもしろい。

△左京▽

左京なる人物が果して誰であつたかはつきりしない。しかし、仲文とは相当な恋愛関係にあつたらしく、その贈答歌は仲文集の中でも数多いほうである。例をあげると、

○同じ左京の君

あな侘し人目の関を越分て道を忘るゝ時の間ぞなき

(歌仙)

○返し

心にも非ずうかりし夢路には忘ぬ物ぞ侘しかりける

(歌仙)

のようなものである。

△たじま▽

たじまと称する女性が誰であつたかは詳らかでないが、仲文集をもととして、考察した結果、承香殿の女御に仕えていた但馬ではなからうかと考えられる。なお、勅撰作者部類に「但馬守源弼女」という人物が記してあるが、古今、後撰集時代の人なので年代的にずれが生じる。同じく勅撰作者部類に「親子内親王家の但馬」という人物が記してあるが、親子内親王は承香殿の女御である徽子の娘であるから徽子の亡きあと親子に仕えたとも考えられるが断定はできない。

△もとのめ▽

もとのめとは旧妻のことで、仲文が以前に妻としていた女のことである。歌は、

○古きめのくれこひたるに

花咲かぬ朽木の袖のそま人のいかなる暮に思ひいづらむ

(歌仙)

○元のめをやんごとなき物には思ひながら、又知る人多かりけるにもとをばはしのま仿にて物語などして

ここに居給へれ今参らむとていにければ誠とて

筵のかぎりに居明して暁に帰りきたるに板の上に

さゆばかり置かれて冷えにけりと怨みければ

理や下はさこそは冷えつらめ君に敷べき思なければ

(歌仙)

というような歌である。「花咲かぬ…」の歌は新古今集の恋歌にとられていて、その詞書に「年頃絶え侍りにける女のくれといふもの尋ねたりけるに遣すとて藤原仲文」とある。「理や…」の歌は、負けおしみを言っている点でいかにも仲文らしく、おもしろい。

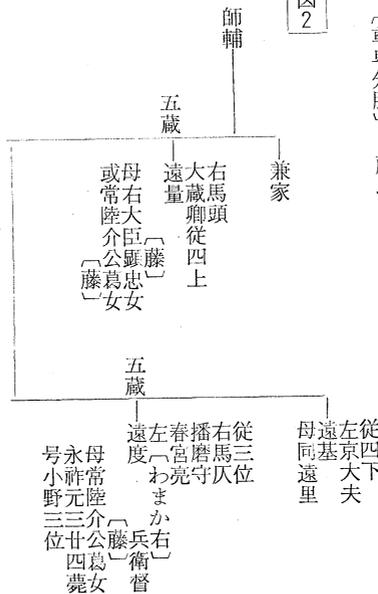
総括

藤原仲文は、自分の人生を極く気ままに送ったのではないだろうか。仲文集全体を通して、娘を失った時以外は、うらやましい程陽気である。恋の歌にしても、同僚と交す

贈答歌にしても常に得意の洒落をとばしている。また、時代の波に極く自然にのり、適当に官職にもついており、一口にいって要領のよい人物であったようである。

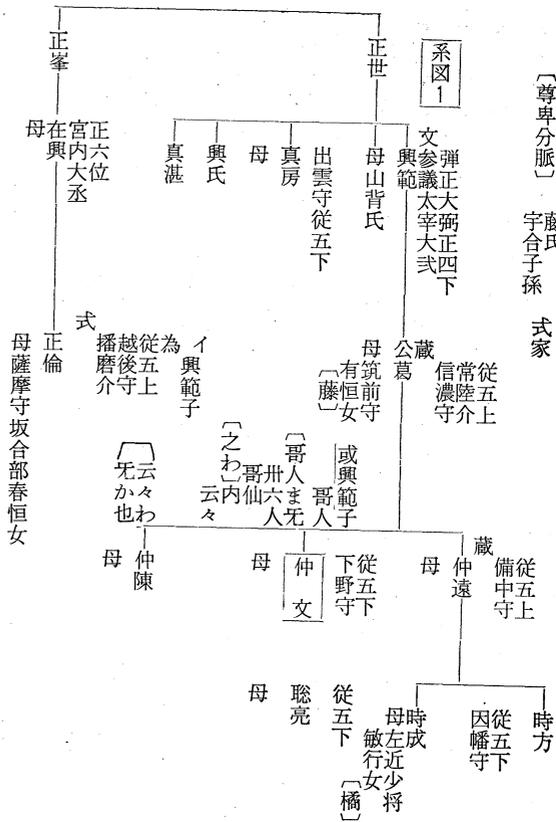
〔尊卑分脈〕 藤氏

系図 2



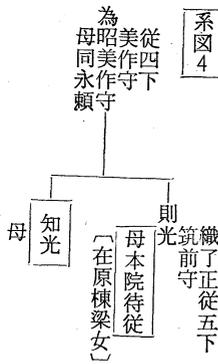
〔尊卑分脈〕 藤氏 宇合子孫 式家

系圖 1



系圖 4

〔尊卑分脈〕



の系図を示すと

系図3

